

「自分が変わる。」

高山市立北稜中学校 3年 河合 渚

「どうしてこんな家庭に生まれてきたんだろう」

そんな風に思ったことが、私には沢山ありました。父と母、兄二人、そして私の、家族5人で出かけると、周りの人からの冷たい視線を感じるからです。

私の兄二人は、知的障がい者です。一番上の兄は、会話ができません。「喜怒哀楽」を言葉では表現できないのです。だから、訴えたいことがあると、人をつねったり、嘔んだりします。二番目の兄は、話すことや読み書きはできます。ただ、時に人を叩いたりすることがあります。二人とも、何か伝えたいことがあると、言葉にならない声をあげます。外出先で、兄が突然、声をあげたりすると、周囲から冷たい視線が向けられるのです。さらに、「あの人、怖い」などと言われ、「何でそんなこと言うの?」と、悲しく悔しい気持ちで胸がいっぱいになります。

ただ、そんなときに、私は何も言い返すことができませんでした。障がいをもつ人を見ると「関わりたくない」と思う自分がいたからです。

「兄ちゃんの面倒、見てくれる?」

そう母に言われると、

「どうして私は兄妹でも一番下なのに、兄ちゃんの面倒なんか見んならんの?」
とっていました。私が小学校6年生になると、兄は二人とも、特別支援学校へ通うようになりました。平日は学校の寮に住み、土日しか家に帰ってきません。兄たちと接する時間が短くなって、「兄ちゃんたちのことは自分には関係ない」「どうでもいい」と思うようになっていきました。私が中学校1年の頃からは、兄たちの通う特別支援学校の行事に、両親と参加するようになりましたが、正直、嫌々行っていました。

兄たちのことをそんな風に思いながら過ごしていた日々は、とても苦しいものでした。友達に知られたら、「そんな兄弟がおるの?」と言われそうな気がして、隠してきました。でも、そんな日々を大きく変える出来事が、昨年ありました。

私の通う北稜中学校では、毎年、「人権集会」が行われます。学校の中で、寂しい思い、辛い思いをしている人はいないか、どうしたらそんな思いをせず、笑顔で生活できるようになるのか、全校生徒が話し合いました。集会も終わりにさしかかり、校長先生のお話がありました。校長先生は、目に涙を浮かべながら、こう言われました。

「自分が変わらなきゃ、他人は変わらん!」

自分の考え方や、行動を変えなければ、決して周りも変わってくれないのだ、私が変わらなければ、いつまでたっても、兄たちに対する周りの見方は変わらないのだと、その時気づきました。

それから、私は兄たちとなるべく多く接するようになりました。嫌々行っていた、特別支援学校の行事にも、自分から「行きたい」と思うようになりました。以前は、兄たちとも違う、さまざまな障がいをもつ人を見て正直驚き、「なるべく関わりたくない」と思っていました。でも、何回も特別支援学校に足を運ぶうちに、「障害」ではなく、その人それぞれの「個性」なのではないかと思うようになりました。

そんなとき、何気なくテレビを見ていると、盲目の少女、「立木早絵」さんがこう言いました。

「私は、『目が見えない』のではなく、『物を見るのが苦手』と思っています」と。その言葉を聞いて思いました。

「運動が苦手、〇〇が苦手…というように、兄ちゃんたちは感情表現が苦手」

土日になると家へ帰ってくる兄たちの部屋で、私はよく一緒にテレビを見ます。兄たちが声をあげると、それは、「ここにいるよ」と言っている気がするのです。言葉にはなっていないけれど、私を必要としてくれている…そんな兄たちと、少しでも多く一緒にいたい、と思うようになっていました。

以前の私は、兄たちに対し「関わりたくない」と思い、周囲の目を気にして、友達にも障がいのことを隠してきました。でも、今は違います。二人とも、私の大切な家族だと胸を張って言えます。自分の考え方や行動を変え、兄たちと関わる時間を増やしていくうちに社会には色々な人がいるということを改めて知りました。そういう人に冷たい視線を向けるのではなく、どれだけでも多くの言葉をかけ、家族のようにつながった社会にしていきたい、そう思います。そんな社会にしていくためには、まず「自分が変わる」こと。それが、兄たちが私に教えてくれたことです。